

連載：原点

## 生きる力と学校教育

小見川高等学校 後藤 翔太

生きる力とは何だろうか。新学習指導要領では、生きる力を「知・徳・体のバランスのとれた力のこと」と表現しています。「知」は確かな学力を指し、「徳」は豊かな人間性、「体」は健やかな身体を表しています。私は、この生きる力を育む授業を展開するにはどうしたらよいか、常日頃から考えてきました。

私は、小学生の頃から教員を目指してきました。小学校1年生から私立高校の非常勤講師まで野球を続け、他にもバレーボールやバドミントン、水泳、ラグビー、フライングディスク、ボルダリングなど様々なスポーツに取り組んできました。高校は進学校ではありませんでしたが、大学受験をし、すべての大学に落ち、気持ちが落ち込みながらも浪人をし、予備校に箱詰めになりながら必死に勉強してきました。アルバイトでも大学受験の塾の講師、焼き肉屋での接客、コンビニの夜勤、派遣など様々な経験をしました。

今考えてみると、これらの経験から知らず知らずのうちに生きる力を多少ながらも獲得していたのかもしれませんが。では、この生きる力を育むためには、どのようなことを数学の授業に取り入れていけばいいでしょうか。私は、まず学校の教科書をわかりやすく、色を使ってポイントをまとめ、生徒主体で授業をしっかりとやるのがとても大事なことだと思います。次に、教科書をきちんとやることを前提として、導入部分で「なぜ勉強しなければならないのか」「なぜ因数分解が必要なのか」「なぜ予習・復習は大事なのか」「なぜ校則はあるのか」「なぜいじめをしてはいけないのか」など様々な問いに対してきちんと説明をし、さらに学校生活を送る上での心構えについて説明をし、LHRなどの時間を利用し、議論するべきではないかと思います。上記の内容を一緒に考えることが、生きる力を育む授業につながると思います。そうして、生徒一人一人が活気に満ち、より良い学校生活を送ることができるのではないのでしょうか。

私自身、まだまだ経験が浅く勉強不足なところも多いです。この考えの実現も時間がかかり、もしかすると、机上の空論になってしまうかもしれません。しかし、私たち教員があきらめずに熱意をもって接していくことが大事なことだと考えます。だからこそ周りの人と相談し、協力し合い、起こっている問題に取り組まなければなりません。私が高校で教育実習をした際に担当してくださった先生から次のような言葉をいただきました。「クラスが十あればすべて違う性格になります。個々まで広げると十人いたら十人十色、百人いたら百人百色なのだ。それが個々に応じた教育で、教員は生涯勉強、臨終定年だ。教員は教員でありながら勉強していかないといけなく、臨終したときにはじめて定年を迎える。そのように謙虚な気持ちで取り組んでいればこの先何があっても大丈夫でしょう。」この言葉を忘れずにさまざまなことに挑戦し、実践し、協力し合い、日々の教員生活を送っていきたいと思います。